

NHK大河ドラマ「軍師 官兵衛」V

大河ドラマに須恵町は出てこない！

八月二十四日放映の「軍師 官兵衛」

第三十四回。島津氏が大挙して九州北部に入り、追い詰められた大友宗麟は関白秀吉に救援を願います。

秀吉は家康を恐れていて、家康に背を向けて九州に行くことができません。そもそも秀吉が天下人になったのも、毛利と戦う秀吉を救援に向かおうとした信長が、安土城を離れて京都本能寺に入ったところで、明智光秀に討たれたことによるのです。光秀を討って信長の仇をとったことで、秀吉にも運が向きました。

秀吉が救援を求めなければ、そして信長が救援に向かおうとしなければ、信長は生きていたはずですし、天下人秀吉もありえない話でした。それだけに、秀吉は歴史を繰り返すことを恐れる

ていたとも言えます。

今、ドラマの中で、秀吉は信長の後を継いで、天下統一を成し遂げようとしています。まず毛利との和平に成功し、四国征伐で長宗我部を高知に追い込み、九州征伐で島津と戦います。この後は小田原城にいる北条征伐です。全国の大名が秀吉の軍門に降った時、天下統一は成就します。信長と秀吉によって天下統一が進められた時代、それが安土・桃山時代です。

「織田がつき 羽柴がこねし天下餅 座りしままに 食ふは徳川」

信長と秀吉によって成った天下統一。結局はその成果は家康に持って行かれてしまふ、というわけです。「天下餅」は「天下持ち」でもありません。家康の気持ちがあかぬ秀吉は、

不安にかられて妹と母親を人質として差し出そうとします。ドラマでは秀吉の苦悩を描いていました。家康が秀吉のもとに来れば、秀吉も心置きなく九州へ行けるのですが、今は行けない。

そこで、秀吉は官兵衛（黒田孝高、如水）を九州へ派遣します。官兵衛は広島で毛利・吉川・小早川と合流しようとしませんが、官兵衛と秀吉のコンビに反発する吉川元春が隠居したことを理由に出でこないと、なかなか九州へ踏み込めません。官兵衛が不治の病の元春を説得し、ようやく九州へ上陸、小倉城で元春は亡くなりました。

小早川隆景率いる先鋒はどこへ行くのか。実は須恵町と篠栗町の境目にあった高鳥居城（岳城山）へ向かうのです。この広報紙がお手元に届く頃には

秀吉はこれを放置することができません。

大友方の拠点、太宰府の北方にあたる岩屋城（四王寺山）が島津勢五万を食い止めます。守るのは高橋紹運。立て籠もった全員が戦死し（落城は七月二十七日）、その数は七六三人とされます。宇美、須恵からも岩屋城籠城に加わっていたようです。あまりの激戦に島津側の戦死者は三七〇〇余人に上ったそうです。ある記録には敵味方男女五千人余りが死んだと書かれています。

岩屋城を落とした島津は立花山に向かいます。ここには立花統虎が籠もっていました。統虎は弱冠二十歳、高橋紹運の長男です。

八月十六日、秀吉の先鋒として九州に近い、中国筋の毛利・吉川・小早川が九州に上陸、それを聞いた島津軍は立花城の囲みを解いて退却を開始します。この時、高鳥居城に筑後出身の星野勢を残していきます。秀吉軍は他に四国の長宗我部氏なども加わっていて、四国勢は豊後に上陸しました。

翌年、秀吉本隊が上陸してからは九州の西、熊本から鹿児島に入る部隊と、東、宮崎から鹿児島に入る部隊にわかれ、総勢二〇万人以上で島津を攻撃し

ようとしています。これに対し島津義久は、頭を刺り、墨染めの衣を着し、金色に輝く礫の木を先頭に、秀吉のもとに来ます。剃髪と墨染めの衣は降伏の意思表示。礫の木はこれで自分をはりつけにしてくださいという意味です。

秀吉は義久を許し、弟義弘を当主として、薩摩・大隅の領地を保証します。鹿児島が戦場になることはありませんでした。それどころか、箱崎での秀吉の茶会に島津氏も参加しているのですから、秀吉の器の大きさは計り知れません。この点では秀吉と官兵衛は似たもの同士で、できるだけ敵味方の命を救い、敵を味方に練り込もうとしました。

さて、高鳥居城に残された星野氏の運命です。以下は、石瀧が『須恵町誌』に書いた文章を引用することにします。



二十五日早朝、島津氏の城代としてたてこもる星野吉実・吉兼に対し、父高橋紹運を殺されて、とむらい合戦の意気に燃える若武者立花統虎が戦いを挑みました。立花城（新宮町と福岡市東区にかかる立花山頂）を打って出た立花の軍勢は、巳の刻（午前十時）

には高鳥居城の麓に到着、ときの声をあげて攻め寄せました。

統虎は高鳥居城を見おろす若杉山の山腹に布陣、五〇〇人の軍勢で城の大手（正面）の十間戸樋から攻めにかかると。一方、からめ手（裏門）には統虎応援にかけつけた小早川隆景の兵二〇〇が須恵村からよじ登る。星野兄弟はかねて勇猛のほまれ高く、そのうえ城兵二〇〇の中には訓練された鉄砲隊も加わっていて、必死の抵抗に寄せ手にも戦死者が続出する有様でした。銃弾は統虎の身近をかすめ、また寄せ手に加わっていた宇美の住人宇美善四郎も鉄砲にあたって死んでいます。

立花勢が城内に乱入し、城は燃えあがりました。星野吉実は立花次郎兵衛が槍を合せているところを十時伝右衛門に斬り伏せられ、討ち取られました。十時は吉実の首を取りますが、届け出の際次郎兵衛に功を譲りました。統虎は後にこのことを知り、陣中の美談として兩人に感状を与えています。

秀吉が若き統虎の手柄に感心し、「星野兄弟を初め、数百人討ち取ったのは御苦労であった」「まことに九州第一の武士である」と激賞したのは有名な話です。統虎はその後秀吉の島津攻

はすでに第三十五回（八月三十一日放映）は終わっています。第三十五回で高鳥居城が出てくるのを期待したいところですが、どうやらそれはなさそうです。

秀吉軍先鋒の九州上陸は天正十四年（一五八六）八月です。第三十四回で吉川元春が亡くなりましたが、それは同年十一月十五日。高鳥居城の戦いは八月二十五日、何と第三十四回では高鳥居城の戦いより先へと、もう時間が進んでいます。

第三十五回のあらすじをNHKのホームページでみると、秀吉の本隊が九州に出陣すること、キリシタン禁止令を出すことが取り上げられています。これは天正十五年のことですから、高鳥居城の名がちらっとでも出てくることは、まずなさそうです。

島津氏は天正十四年六月に筑前へ攻め込み、秀吉の天下統一を阻もうとし

めに功をあげ、筑後柳河を与えられました。統虎は、後に筑後柳河一〇万石の藩主となった名将立花宗茂です。



秀吉が官兵衛に宛てた手紙が残っています。「立花統虎が高鳥居城を攻め、城主の星野兄弟を討ち取った手柄は言葉に表しようもない。大手柄だと思おう。島津勢の攻撃に耐えただけでもすごいのに、このような手柄を立てるとは、誠に（九州の一物）だと思おう。」（意識）褒美として「新地」を与えるとも述べていますが、この功績によって柳河へ移ることになります。